

「史料 リスボン大地震 その一」

モレイラ・デ・メンドンサ著 永治日出雄訳

『世界地震通史－リスボン大地震』（第二部）

解題 『世界地震通史－リスボン大地震』

モレイラ・デ・メンドンサ著

『世界地震通史－リスボン大地震』（第二部）

【解題】 『世界地震通史－リスボン大地震』

リスボン大地震に関する主要な文献として筆頭に挙げられる『世界地震通史－リスボン大地震』 *Historia Universal dos Terremotos, que tem havido no Mundo* は地震発生の三年後、一七五八年にリスボンで公刊された。原典の表紙に誌された本来の書名とその試訳を左記に掲げる。

JOACHIM JOSEPH MOREIRA DE MENDONÇA, *HISTÓRIA UNIVERSAL DOS TERREMOTOS, QUE TEM HAVIDO NO MUNDO*, de que ha noticia, desde a sua creaçāo até o seculo presente. Com huma NARRAÇÃO INDIVIDUAL Do Terremoto do primeiro de Novembro de 1755. e noticia verdadeira dos seus effeitos em Lisboa, todo Portugal, Algarve, e mais partes da Europa, Africa, e America, donde se estendeu: E huma DISSERTAÇÃO AO PHISICA sobre as causas geraes dos Terremotos, seus effeitos, differencias, e Prognosticos; e as particulares do ultimo, Lisboa, 1758.

ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサ著『万物の創造から今次の世紀に至る世界地震通史－とくにリスボン、ポルトガル全土、アルガルヴエ、およびヨーロッパ、アフリカ、アメリカの多数の地域を震撼した一七五五年十一月一日の地震に関する個別の記録、ならびに地震の原因、結果、差異、予測に関する自然学的論究－』リスボン、一七六八年。

このように長大な書名であるため、本稿では便宜上『世界地震通史－リスボン大地震』または『世界地震通史』の略称を用いる。著者はポルトガル古文書館の史官ジョアキム・ジョゼフ・モレイラ・デ・メンドンサである。彼はみずから大地震の艱苦を体験し、王都壊滅のさなかサン・ジョルジエ城において重要文書の保全に献身した。全巻六百項、三百頁の同書には王権・教権による検閲認可が付せられている。著者自身の序言に続いて三つの部門、すなわち世界における地震の歴史、ついでリスボン大地震の諸相、最後には地震に関する古今の学説が論じられる。ここに邦訳を試みたのは、同書の中核をなす第二の部門、いわば第二部の全文、第四七二項から第六四一項までであって、リスボンにおける大地震の

経緯、ポルトガル各地の状況、アフリカなど国外への波及、一七五七年秋までの余震の記録にあたる。

リスボン大地震に関する多面的研究において先駆的な役割を果したT・D・ケンドリックは、『世界地震通史』全巻をもつとも優れた同時代の証言、従来のあらゆる地震研究を凌駕する作品と称讃した。しかし、この分野における多くの書物や論文も、モレイラ・デ・メンドンサの労作に関して、地震発生を告げる第四七三項など僅かな部分を紹介するに止まっている。

『世界地震通史』の論述を読解するためには、十八世紀ポルトガル語への習熟と地震学の成果への通曉はもとより、学芸百般にわたる深い素養が必要と痛感される。おそらくこうした事由もあって英訳などヨーロッパ語系の翻訳も見当たらず、残念ながら邦訳もなされていない。すべての要件において非力な筆者が、敢えてここに試訳を披露し、諸賢の叱正を仰ぐ所以である。

（永治日出雄）

モレイラ・デ・メンドンサ著

『世界地震通史—リスボン大地震』（第二部）

リスボン、一七五八年刊

地震の歴史 一七五五年十一月一日

【第四七二項】 この年十一月に人類が体験した地震は、規模の大きさによつて後世のあらゆる世紀に想起されるであろう。なぜなら、その影響は遺憾にもきわめて多くの地域に及び、アジアのみが免れたからである。甚大な被害を蒙つた地域の第一はポルトガル王国、とくに国王陛下の王宮を擁し、殷富で人口稠密な都市リスボンである。最初にこの都会における大地震の結果を報告し、さらには王国の各地や連関する諸地域についてその影響を叙述したい。

【第四七三項】 十一月一日、月暦二八日、大気は静穏で、雲はなく快晴。十月から温暖な数日が続き、秋としては多少暑さを感じた。気圧計二七インチセライン、レオミュール温度計一四グラオ（訳注*）、北東の微風。午前九時半をすこし過ぎた頃、大地が揺れ始めた。その震動は地底から地面へ突き上げ、衝撃を増しながら、北から南へ搖きぶるよう続いた。これに伴つて建物の被害が生じ、数分のうちに倒壊と壊滅が始まり、大地の激烈な震動とその持続に人々は抵抗できなかつた。第二の震動は一層規則的に七分か八分続き、短い中断を挟んで二度の地震が起つた。あたかも遠くで雷が鳴るときのように、地下の雷鳴ともいうべき轟きが、この時間に終始聞えた。猛烈な速度で走る馬車のように多くの人々は思った。まさしく大地から噴出する蒸気によつて、太陽の光が多少とも暗くなり、そこに含まれる硫黄の成分から臭気が発散するように感じられた。大地のあちこちに幅広くはないが、延々たる亀裂が認められた。建物の壊滅によつて発生した粉塵が王都の一帯を濃い霧で覆い、あらゆる生きものを窒息させた。

* 気圧計二七インチセライン、レオミュール温度計一四グラオは気圧計

約二三八ヘクト・パスカル、温度計摄氏一七・五度に相当する。

【第四七四項】 こうした大地の揺れによつて海水が背進し、岸辺では初めて見る海底も露出した。また、海嘯が屹立した丘陵をも洗い、尽きざる震動が沿岸のあらゆる民族へ影響を及ぼした。氾濫は大きなもの三度、小さなものの数度にわたり、多数の建物と水辺の多くの住民を破滅させた。

【第四七五項】 このような光景が悲痛な記憶を私に甦えらせる。多くの悲惨な事実が念頭に浮かび、それらの膨大さ、多様さ、深刻さは仔細に語るのを私に躊躇させる。だが、災厄の一端を話すだけでも、巨大な全貌を知る手掛かりになるかもしれない。

【第四七六項】 おりしも万聖節の祭日として盛儀が予定され、その時刻にはあまたの人々が教会へ参集し、聖職者の説教に恭しく聴き入るか、当日の式典を待ち受けていた。同じ目的で寺院を目指したり、用務を果たすため、道を急ぐ人々もかなり見られた。王都の住民の大半は自宅にいて、人によつてはまだ床を離れない。地震に気づくや、すべてが脅威、混乱、無秩序となつた。

【第四七七項】 ある人たちは屋内で茫然として地を踏むことも、戸を叩くこともできず、他の人たちは街路に飛び出して、障壁の瓦解によつて死んだ。街路から教会へ避難する者もあり、降りかかる危険を避けるため教会から逃れる者もいた。住居の倒壊によつて多数が石材の下敷となつて絶命し、瓦礫に埋まり、救助を求めて泣き叫ぶ者もあつた。

【第四七八項】 破壊された多くの寺院、階梯、穹窿、障壁が群衆の頭上に落下し、逃げ惑う彼らは神の慈悲を求めた。そうした叫びは聖母マリアの加護を願つてもなされる。同じ叫喚は王都のあらゆる街路や地点、近郊のさまざまな地区で聞かれた。地震の脅威、建物倒壊の轟音、死への恐怖、男衆の喚き、女子供の泣き声が異常な喧噪と錯乱を惹き起し、全般的な恐慌によつて危機に対応できぬ状況となつた。

【第四七九項】 こうした怖るべき騒擾のなかで愛だけが滅びなかつた。父は子から引き離され、子は生みの親を見失う。恋人たちはたがいに探し求めた。なにびとも財貨を頼りにできず、どうにか生き残ろうと、魂の救済だけを願つた。

【第四八〇項】多くの死者を調べたが、禍因はさまざまであつた。ある人は安全な家屋から離れ、かえつて他家の障壁の下に生き埋めとなつた。ほかの人は目を天に向け、跪拝したまま石材崩れで絶命した。こなたでは救われた母親が死せる子を抱き、かなたでは息絶えた母親に抱かれる子が救助された。落下する石から子どもを両腕で護つた人もある。カルメル会修道士と思われる人物が、進退極まる高窓に残され、遠方にいる聖職者に赦免を願つて、火焰で焼かれるまで儀に待機した。これこそ神が下された畏怖すべき審判の顛末である。

【第四八一項】障壁の大きな形骸の下で煉瓦を集め、坑道を造つて脱出した修道女もいる。身に帶びた衣服が瓦礫に絡まり、身ひとつで抜け出した人もいる。奇蹟的なまでに俊敏な対応である。寝たきりの患者や瓦礫による重傷者をも含め、いかに多くの人々が医者も医薬もなしに幾日で気力を取り戻したことか。これらこそ神慮による奇蹟にほかならぬ。

【第四八二項】家屋を喪失した人たちが多数テージョの河畔へのがれ、震えながら荒墟を仰いでいた。突如そこへ怒濤のように上げ潮が押し寄せ、リスボンのみならず、二レガ（訳注*）離れたりオ河口の都市まで被害を及ぼした。海流 - 6 - は従来の限界を超えて多数の建物を水没させ、サン・パウロ地区に氾濫したのである。どの水辺でも高潮は激しさを増し、新たな危険が王都と近郊に拡がつて、全土が海に呑まれるとの噂が飛び交つた。

*ポルトガルでは一レガは六六〇メートルとされる。

【第四八三項】度重なる危険に動顛した人々は、狂気のように絶え間なく叫びながら、田野を動きまわつた。画像を手にして、祈祷を唱えると、多くの者が見做つて震える声を張り上げる。他の者は黙り込み、放心したよう歩いた。

【第四八四項】修行の場である僧院の廃墟を修道女たちは無念にも離れ、頼れる縁者や避難できる田野をそれぞれに捜した。引き裂かれたキリスト教徒の妻が、泣き叫びながらひとり田野をさまよう光景は、もつとも哀切な絵図であった。若干の人々は破壊を免れた修道院の鐘楼に避難し、神の慈悲を待ち望んだ。

【第四八五項】最初の地震のあとすぐにルリサル侯爵邸、サン・ドミンゴ教会、城砦会堂などから火の手が昇り始め、建物の灼熱と火炎が材木に移つた。か

くして災厄は倍加し、惨事が一層深刻となつた。血に塗れた人も虚弱な人も多くは荒墟から逃れたが、重病で寝たきりの患者は、そのように脱出できなかつた。瓦礫によつてあまたの生きものも四肢を碎かれたり、板挟みとなり、逃れようとな喧嘩に鳴き続ける。これらすべてが炎に焼き尽くされた。語りえないほど凄惨なのである！

【第四八六項】 震動は数時間毎に繰り返し、激しさは減じたものの、同じような脅威を感じさせた。かくも激烈な地震によつて大地が割れるのではないかと人々は恐れた。サン・ジョルジエ城へ火の手が迫るや、流言が飛び交つた。城内に藏される火薬に引火し、王都全域を脅かして、地震を免れた人をも焼死させると言うのである。怯えた心は理性的に思考できず、震えた呼吸と慌てた歩調で王都から一レガ、二レガ、三レガ離れた地点へと連夜歩いた。

【第四八七項】 こうした流言は幾人かの悪者に帰せられる。豪華な邸宅で掠奪できるよう、無人の都にするようを企てたのである。彼らの強欲から広汎な衰弊が惹き起された。なぜなら、若干の地域では火災を阻止できたのに、被災のないものさえ、すべて見棄てたからである。邸宅が焼け崩れても、命だけは護ろうと、富裕な王都の住民は多く思案した。

【第四八八項】 沢山の修道女と聖職者が荒墟のなかを巡回し、ときには礼拝の式服ですべての死せる者生きる者の赦免を行い、神と聖母の慈悲を哀願した。他の地域では罪人が悔悛と贖罪に導かれる。多くの一般人も教えを説いた。婦人や田舎者さえ説教師に変身したのである。だれもが神の怒りを怖れ、王都とわが命の最終的な破局に怯えた。神への畏敬を説く一言一句も無益ではなかつた。なぜなら、多くの罪を省みて、素直な心には涙が溢れたからである。新たな震動と火災のなかで悔悛の情が各人に俗事を忘れさせた。断罪の恐怖で体は震え、神の慈愛を求めて心は燃え、繰り返し溢れる涙で息も窒まるようである。再会した人々は会釈してたがいに赦しを求める、それまでの対立と憎悪を解いた。こうした態度を採らず、いわば憂き世の災難としか思わぬ者もいる。多くの異端者が己れの迷妄を恥じらい、恩寵のもとで新たに生まれた。

【第四八九項】 国王陛下と一家はベレンの離宮にいて被災を免れて田園へ避難され、そこに建設された立派な仮設御所で数ヶ月生活された。（マヌエル王子だけはネセシダデス宮殿に住んでおられた。）こうして造られた広壮大アジュ

ダ宮は、壮大で完璧で木造とは思えないほどである。これら高貴な方々の安否を気遣う人々は、国王ご一家が危機から脱したのを知つてみな喜びに耐えず、リスボン艱苦の当日愛する者や信頼する者とその喜悦を分ち合つた。

【第四九〇項】 最初の夜から悲痛な叫び、絶えざる衝撃、続発する地震へ恐怖、かつまた王都のほとんど全域を襲う火災が、すべての人々の艱苦を倍加させ、財産の欠如と両親の配慮の喪失を痛感させた。大半の家族が引き離され、頼るすべもなく泣き続ける。かくも多くの苦難に耐えうる人だけが、神意により救われると思われた。

【第四九一項】 火焰は家々を焼き続け、地震も衰えを示さない間に、罪深い盜賊は神をも炎をも怖れず、侵入した邸宅で金銭、宝石、衣類を掠奪した。地震でも家が崩れず、火災の被害も受けぬ多くの家族が、盜難によつて文無しになつた。これらの多くはガレー船を科せられた罪人や牢獄から脱走した囚人に帰せられる。

【第四九二項】 火災の連続と地震の続発によつても私たちは祖国と国土への愛を忘れなかつた。神は罪人の赦免を望まれ、魂の救済のため大地を示された。王国のあらゆる都市、町村、地域にいる近親や友人を求めて、その土曜日多くの人々が歩き続けた。以後幾日も悩める旅人が街道に溢れる。近郊の野に留まる人々は、豪華な寺院、壯麗な宮殿、神聖な殿堂、さらには宝石、調度、衣装など多くの富が炎上するのをときには目のあたりにした。

【第四九三項】 私はこれらの災害の目撃者である。自宅で最初の震動に襲われ、眼前で庭も崩れたが、神の慈悲で自分は救われると感じた。家族すべてに傷害はなく、被害を免れた自宅にしばらくいた。サンタ・バルバラの野へ行くと、主キリストの慈悲と聖母マリアの加護への祈りが続けられ、私は深く感動したが、祈祷に没入できなかつた。数千人が暮らし、数名の神父も住む地域を、サン・ジヨルジエ城炎上の恐怖が無人としたのである。城郭には市会議所の資料保管室もあつて、所有地に関する重要文書一万六百件蔵され、それらを保管するのが私の大切な職務であつた。危急の際そうした書類を防備するため、建物の門口を離れてはならなかつた。少数の人たちの協力を得て、そこで最初の数日を過したが、惨禍と脅威しか見えず、悲鳴と号泣しか聞えなかつた。

【第四九四項】 敬虔な家族や寄り合う民衆が毎日祈祷を続け、聖像ベンハ・フランサの前で聖母マリアの加護を祈った。ほとんどが半裸であつて、みな平伏したままである。近親の安否の知れぬ人は、声よりも涙しか出ない。被害や生死や災厄について尋ねることなどできなかつた。掘り出された生きものは色も形もなく、すべてが悲痛であり、悲惨である。太陽の光が消え、いつも物寂しい夜がいまやきわめて怖ろしく感じられる。なぜなら、喜悦と時刻と調和を告げる鐘が消失し、一切が不気味な沈黙に包まれ、怯える生きものも声すら発しないからである。

【第四九五項】 なによりも神への愛と隣人への博愛が人々の心に溢れた。敵同士が抱擁し、たがいに救しを求めた。友人や知己が生きているのを知り、たがいに祝福した。肉親や財産をなくした人も親身に慰め合う。徳高く誉むべき行為であるが、ながくは持続しなかつた。

【第四九六項】 埋葬されない遺体が寺院や街路、さらには建物の残骸のなかに横わつていた。極度の苦悶を続ける重傷者は、生き延びるよりも死を願つた。比較的軽度で生き残れる負傷者も、荒墟において救援を得られず、多数死亡した。死者を葬るため迅速に行動するよう、総大司教枢機卿猊下は聖職者と教区司祭に指示された。同じ配慮を国王陛下も示され、人々を適切に導くため国王軍の将校を重要な用務に任命された。聖職者ではないが、こうした活動に幾人かが献身的に従事した。ラフォエンシア公爵の弟、ジョアン・デ・バルガンサの深い徳業は傑出しており、倒壊した建物の危険を冒して日々働き、あまたの生物を救つたり、多数の遺体を埋葬した。サンパヨー殿も怖ろしい危険をも顧みず、幾人かと協力し、数週間同じような作業を続けた。二四〇の遺体が墓に葬られ、多くの生命が荒墟から救出された。治療のため病院へ運ばれた者もある。天の特別な恩寵によつて荒墟で生き残った人のなかには、四日後にベンハ教会で救出されたひとりの男性、七日後にサンタ・マリア大寺院で救出されたもうひとりの男性、そしてカノス街で九日後に救出された少女が含まれる。

【第四九七項】 称賛すべき愛徳をもつて若干の貴族は外科医を伴つて数日間田野を巡回し、放置された負傷者を治療した。王立誠信病院の指示によつてサン・ベント修道院とサン・ロケ修道院に団地が設けられ、無数の負傷者をそこへ運んで、多くを治療した。彼らの大半は腕や脚を切断し、多数の負傷者が傷口から壊疽で死亡した。

【第四九八項】 王都の中核全体が怖るべき沙漠と化し、火災で黒焦げの高層建築の先端以外には、瓦礫の山と灰燼の山しかなく、いつも大きな人波と豊かな財富で溢れた大道も、形跡しか見当らない。王都を熟知する人は、どこに踏み入れたか判らず、慘憺たる現実を見て、脳裡の記憶を疑つたのである。

【第四九九項】 総大司教猊下はミサの供物を捧げるため、田野に運搬できる祭壇の製作を命じられた。また、万聖節の当日必要なものを持ち運び、サンタ・バルバラ草原でもミサが行われた。

【第五〇〇項】 リスボンの住民は近郊の田野や王都の周辺を放浪した。ここでも神慮の偉大きさが明白に感じられた。幾千もの家族が住居も衣服もなく、食物を買う金子も持たず、悪天候から身を護るのに必死であつたが、慈愛深く至高なる父に彼らは支えられ、飢餓で絶命する者はなかつた。

【第五〇一項】 慈父の心と王者の勇氣をもつて徳高き国王陛下は、広大な田野に居続ける幾千人もに必需品を支給するよう命じられた。ベレンへ移された者には、必要に応じかならず医薬が供される。多数の王族や沢山の外国人にも仮設小屋や板塀用の木材が調達された。

【第五〇二項】 この災厄に率先してアントワーヌ殿下、ジヨゼ殿下、ガスパル殿下は、寛仁と高潔な気概をもつて対処された。壮大なパルハーラ宮殿の広大な緑地では、庭園と森に千人以上が収容された。みな充分な食糧を提供され、数ヶ月そこに留まる。彼らの需要を充たすため、沢山の衣服も送られた。こうした親身な厚意と大いなる博愛に対して到るところから讃辞が寄せられる。その名声は世界に伝えられ、諸殿下の徳業が遍く称讃されるに至つた。

【第五〇三項】 すべての聖職者は僧院の門戸を開け放ち、幾百もの家族を受け入れた。あらゆる場で多くの博愛がなされたが、改革的な聖アウグスチヌ修道参事会員と博学のサン・フイリイッペ・ネリ信心会員がとくに際立ち、殻らはサン・ヴァンサン修道院とネセシダス修道院の構内に多数の家族を避難させた。

【第五〇四項】 多くの貴族や個人が博愛という美德を実践し、能うかぎり最大の寛仁をもつて邸宅や農園にあまたの民衆を寛大に受け入れた。すべては徳

業の機会を授けるという神の意向である。主イエスは貪欲な者の多くを氣前のよい慈善家に変身させた。つねに神慮が無限に偉大であることに感嘆する！

【第五〇五項】 地震と火災はきわめて広大で人口稠密な都市の主要かつ最良の地域を崩壊させ、破滅させた。地震による様々な破壊について述べたあとは、火災による大規模な被害についてまず語ろう。

【第五〇六項】 旧市街の大半と新市街の多くが火災によつて灰燼に帰した。火災の被害を受けた範囲を描けば、円周一レガ以上に及ぶであろう。火の手はサン・パウロ教会から始まり、沿海部の広域へ拡がつた。円周はこの教会からルモラレス、王宮広場、ナオス河岸、王宮広場、シダード河岸、カエス・デ・サンタレムを経て王の泉にまで到る。そこからサン・ペドロ拱門とサン・ジョアン・プラサ教会の背後へ登り、サン・ジヨルジエ教会へ向つた。さらにそこからサント・エロイオ修道院のサン・マルチノ教会正面へと登り、サン・バルソロミユウ教会正面まで拡つて、城砦をも脅かす。坂を下つて火の手は、アンソルファ門、サン・パトリシオ・コレジオ、サン・マメド教会、城砦海岸へ進み、サン・クリソヴァオ教会の側面と正面を経て、ボラテーム井泉裏手のサン・ジュヌスタ教会の背後へ達した。王立病院とサン・聖ドミニゴ修道院へも燃え拡つて、ロシオ広場で修道士小路へ転回し、カダヴアル公爵の宮殿を通り、ガリシア街、コンデッサ街、オリビエラ街を経て、三位一体修道院に入り、サン・ロケ教会裏手に登つて、ノルテ街、カラサテス街、バロッカ街、アタラヤ街のそれぞれ大半を焼き尽し、さらに改宗者修道院門前のカルカダ・デ・コンブロ街を横切つてシャガ教会を通つて、そこからサン・パウロ教会の背後、火の手に描かれた円周の起点へ戻つたのである。

【第五〇七項】 こうした円形のなかでいわゆる河岸地区、ノーバ街、ロシオ、そしてレモラレス、アルト・バイロ、リモエイロ、アルファマの諸地域の大半が火災によつて完全に壊滅した。これらは首都を構成する十二地区のうちもつとも富裕で人口稠密な七つあたる。火焔に焼き尽くされた王都の広大な部分には総大司教教会、およびサンタ・マリア大寺院（旧リスボン大聖堂）、およびサンタ・マリア・マグダレーナ教会、聖母受胎教会、サン・ジョアン・ダ・プラサ教会、殉教者教会、秘蹟教会、サン・ニコラウ教会、サン・マメード教会、サン・バーソロミュウ教会、サン・ジユルジユ教会、サン・ジョアン・ダ・プラサ教会の諸教区が完全に含まれる。また、サン・パウロ教会、托身教会、サンタ・ジユスタ教会、サンタ

・カタリーナ教会、サン・クリストヴァオ教会の諸教区（これらでは教会も焼失した）、および城砦にあるサンタ・クルズ教会の教区もそうである。

【第五〇八項】 この園内では豪華な三位一体修道院、カルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、アイルランド・ロザリオ修道院、聖靈修道院、ボアホラ修道院、キリスト教団修道院、サン・ドミンゴス修道院、サント・エロイ修道院が、それぞれ豪華で壯麗な教会とともに灰塵に帰した。城郭の会堂、サンタ・マリア・マグダレーナ改宗者修道院、サン・ロレンソ・カルモマリア孤児院も同じように被害を受けた。

【第五〇九項】 サンタ・マリア大寺院では時計塔をはじめ古式で雄大な建造物が地震によつて倒壊し、教会の炎上によつて礼拝堂、事務所、控室もすべて破壊されたものの、壯麗と讃えられる優美な立像、聖母マリア奇蹟像とその衣装がなんらの傷痕もなく護られた。

【第五一〇項】 豪華なサンタ・アントニオ教会は聖アントニオその人が往事暮した旧蹟に建立されるが、かつて里斯ボン分割のとき市会会議室であつた壮麗な建物とともに、また堂内を飾る沢山の銀細工や豪奢な装身具とともに、サンタ・マリア大寺院の教区壊滅の際に焼失した。その裏手にあつて聖歌殿は地震による破壊を受けなかつた。人々はそこで驚くべき聖アントニオの奇蹟を目撃した。中心部の礼拝堂ではきわめて炎上が激しく、銀や銅などの祭具まで溶解したのに反し、聖歌殿はそこからやや離れ、地震と火災を免れたため、燈明や多くの装飾に照らされたまま、祭壇の聖アントニオ像は安泰であつた。

【第五一一項】 同じくこの教区で愛徳信心会の教会と建物が炎上し、マグダレーナ教区では孤児院の教会と施設、聖靈礼拝堂から独立したサンタ・アンナ慈愛病院、サン・セバスティアン教会、聖母受胎教会とキリスト教団修道士コレジオ教会、さらにサン・ジユリアン教区ではオリヴェイラ古礼拝堂、サン・ニキュラオ教区ではパルマ礼拝堂、ヴィクト礼拝堂とその病院、キリスト昇天教会、サン・ジユヌタ教区では万聖節王立病院、アンパロ礼拝堂、難病治療病院、慈恵礼拝堂、サン・バーソノミュー教区ではサンタ・カトリーナ・コレジオ、托身教区では壮大なイタリア・ロウレト教会、シャガ教会、アレクリム礼拝堂である。サン・パウロ教区では慈恵礼拝堂、通称では聖体礼拝堂が地震と火災を免れた。

【第五一二項】 燃尽した殿閣を擧げると、第一はリベイラ王宮であつて、マノエル国王によつて創建され、引き継ぎフイリッペ二世のもとで豪華にされたあと、今世紀に至り贅沢な建造による優美な広い回廊を増築され、先頃わめて壯麗な王立歌劇場がヨーロッパ諸国で称讃を博し始めていた。ついで孤児院を付設するコルト・レアール宮殿（以前にも大火を蒙つたことがある）、ブラガンサ公爵邸（宝物殿とされていた）、アラフオエンス公爵邸、アヴエイラ公爵邸、サン・レンス・アンジェジヤ侯爵邸、フロンティラ侯爵邸、カスカエス侯爵邸、サン・ティアゴ伯爵邸、リベイラ伯爵邸、キュキユリム伯爵邸、ヴィラ・フォール伯爵邸、ヴァラダレス伯爵邸、アヴェイラス伯爵邸、アトウギア伯爵邸、ヴェミエイロ・アルバ伯爵邸、バルバセーナ子爵邸。やや遠いガルリサル侯爵邸もこのとき焼尽した。

【第五一三項】 同じく被害を受けたのは王立税関所の大建築、インド商館、測候所、領事館、王立会計院、七商館である。王宮広場、ナオス河岸、コンソラカオ門前の国際市場とその倉庫、王立裁判所法廷、行政評議会、財政評議会、海外評議会、信教評議会、ブラガンサ館、戦時会計総院、将校宿舎、貯蔵倉庫庫とその広大な事務局、王国・戦争・航海の諸省庁もこれに含まれる。なお、官庁の本部は王宮の敷地にあり、それらの文書保管所では無数の蔵書や書類を喪失し、国家と諸機関に多大の損害を与えた。また、アルジユーベの聖職者懲戒所ふたつとトロンコ聖職者懲戒所も同じく炎上した。

【第五一四項】 火災によつて燃尽したもつとも貴重な品々のなかで、あまたの浩瀚な書籍の喪失が学者には痛恨の極みである。随一とされる王室図書館には貴重な書籍がきわめて多数蔵されていた。そこには英知と度量の発露として国王ジヤオ・マクシモ五世が、近年の莫大な書物に加えてヨーロッパで渉獵されたあらゆる古書や優れた稿本の複写を納付されたのである。

【第五一五項】 ルリサル公爵の広壮大な四棟の建物は稀覯本や優れた稿本で満たされ、飾られていた。博学のエリセイラ伯爵のもとで始められたのち、それはフランシスコ・ザビエル・メネゼス伯爵によつて完全なまでに追補され、後者の英知と該博な識見は歿後ポルトガルと全ヨーロッパで称讃を博した。

【第五一六項】 サン・ドミンゴ修道院の図書館はふたつの広壮大な建物から成り、博学なベネディクト修道士フランシスコ・レイタオ・フェレイラの蒐集によ

る多数の稀覯本や稿本を蔵していた。マヌエル・ギルヘルム神父の高配とふたりの司書の協力によつて、これらの公刊と増補がすでになされていた。

【第五一七項】 聖靈修道院にも広範で精選された図書館およびマリアナと呼ばれる別の図書館があり、ドミニゴ・ペレイラ神父によつて設けられた後者は、聖母マリアに関する膨大な蔵書として尊重されていた。

【第五一八項】 同じようにカルモ修道院、サン・フランシスコ修道院、三位一体修道院、ボアホラ修道院に蔵される由緒ある優れた書籍も灰塵に帰した。それらと同じくどの豪邸でも貴重な蔵書が焼失した。

【第五一九項】 個人の蔵書も多数失われ、なかでも異端審問官シマーラ・ジヨゼフ・シルベイロ・ロドのあまた精選された書物が非常に惜しまれる。五人の豪商の邸宅ではフランス語、スペイン語、イタリア語の書物が、またポルトガル書籍商の二五の店舗と邸宅でも大量の優秀な版本が焼失した。

【第五二〇項】 地震によりサント・アンドレ教区教会、サント・カトリーナ・教区教会、サン・マルティノ教区教会、サン・ペドロ教区教会、ペーナ教区教会、救援教区教会、サルヴァール教区教会、サン・ティアゴ教区教会が完全に破壊された。また、ドス・アンジヨス教会、サン・クリストヴァオ教会、サンタ・クルズ・デ・カステロ教会、サント・エステヴァオ教会、サン・ジョゼ教会、サン・ロレンソ教会、サンタ・マリナ教会、メルセス教会、サン・トメ教会は多大の被害を受けたが、倒壊には至らなかつた。

【第五二一項】 大きな建造物はすべて深刻な破壊を蒙つた。豪華な聖アウグスチヌス会サン・ヴァンサンテ参議員教会では穹窿も破壊され、正面を飾る碧玉や宝石の彫像も崩れたが、修道院の被害は軽少であつた。慈恵修道院と慈恵礼拝堂では大きな教会、充実した聖器室、修練士の館、麗しく浩瀚な図書館が倒壊した。そこでは蔵書も大きな被害を受け、美しく新しい回廊、さらには鐘楼などの建物も著しく破壊された。同じ修道会のベンハ・フランカ修道院では教会が倒壊し、僧坊と回廊が著しく破壊された。この宗派に属するサント・アンタオ（父）修道院では教会が倒壊し、僧院が破壊された。イエスズ会のサン・アンタオ・ドス・パドレス・コレジオでは高貴な教会の穹窿が墜落し、僧院の広い廊下が著しく破壊された。サン・ロカ誓願所では正門が倒壊し、鐘楼などの建築が破壊され

た。コトビア修練院は教会と僧院に被害を受けた。サン・フランシスコ・ザビエル・コレジオ、ナザレス・アロイオス修練院、そのほかイエスズ会の建物すべても同じような顛末となつた。サン・フランシスコ第三修道会のイエスズ修道院も教会と僧坊が著しく破壊された。サン・パウロ修道院の崇高な聖体は宝庫に藏され、損傷を免れた。神慮による破壊は巨大であり、イギリス系のサン・ペドロ・コレジオとサン・パウロ・コレジオへも及んだ。サン・ペドロ・アルカントラ修道院とその教会も瓦解した。カプチン会サント・アントニオ修道院も著しく破壊され、その教会も倒壊した。サン・ベント会エストレラ修道院では教会が全壊した。莊重なサン・ベント修道院、イエスズ・ボアモルテ修道院、カルメル会素足アレマエン修道院とそのサン・ジヨアン・ネブミニセノ教会は軽少な被害であった。

【第五二二項】 尼僧修道院、サン・チャゴ騎士団修道院とサン・ベント・デ・アヴィス騎士団托身修道院は多大の被害を受けた。サンタ・アンナ修道院では教会および古い僧坊の片側が崩れた。サンタ・クララ修道院では教会と修道場が全壊に近い。望徳修道院でも多くの箇所が破壊された。聖母マリア修道院では外壁に被害を蒙り、サンタ・アポリア修道院も同じ結果である。受胎告知修道院とその教会も多大の被害を受けた。サンタ・モニカ頌歌修道院では教会を別として全壊した。救世主修道院の被害は小さいが、教会が倒壊した。受難修道院も同じ結果である。薔薇修道院とその教会は多くの被害を蒙った。トリナスド・モランボ莊嚴修道院も著しく破壊された。しかし、カンポリド施療修道院は損傷を免れた。カルメル会サント・アルベルト修道院は多少被害を受け、カルダエス聖母受胎修道院はかなり損傷した。十字架修道院はほどんど破壊された。ベルナルド会ナザレス修道院は全壊した。

【第五二三項】 アンパ一口孤児院、保護施設、さらにはおよびサン・クリストヴァオ教区の保護施設、改宗者のための聖靈カルダエス修練所も多大の被害を受けた。

【第五二四項】 サンタ・クルス・デ・カステロ教区ではサン・ミゲル僧院と聖靈僧院、アンジヨス教区ではモンテ僧院（サン・アゴスティーノ僧院の旧蹟）とイエスズ・マリア・ジヨゼフ僧院が多大の被害を受けた。同じ結果に至つたのは、サント・エステヴァオ教区では施療教会とその病院、サン・ジヨゼフ教区ではサン・ルイズ・ダ・ナカオ・フランザ教会、救援教会教区では保健教会、处罚

教会教区では由緒あるサン・ラザロ僧院、托身教会教区では清貧聖職者聖母受胎教会である。

【第五二五項】 破壊された殿閣はベンボスタ王宮、異端審問所、枢密院、さらには落成間近な観覧席である。この観覧席は徳高き君主に相応しい建造物であつて、広場を引き立てるよう陛下が設計と建造を命じられた。観覧席に釣り合つて広場には雄大な建物が連なり、麗しい礼拝堂、閣僚の豪邸、枢密院、市庁舎、聴聞室があつた。タボラ侯爵邸、アレグレット侯爵邸、ニザ侯爵邸、タンコス侯爵邸も大きな被害を受けた。ヴァル・デ・レイス伯爵の豪邸もなれば破壊された。ヴィセント伯爵、ソウレ伯爵、ミゲエル伯爵、ウンハオ伯爵、ヴィラ・ノヴァ・ダ・セルヴェイラ子爵、メスキテラ子爵の豪邸も同様である。

【第五二六項】 モンティロ邸、ポルティロ邸、ムルカ邸、ジョゼフ・フェリックス・ダ・クンカ邸、ジョゼフ・デ・メネザス邸、プリンパル・アランハ邸、ダニス・デ・アルメイダ邸、ジョゼフ・ジョワキム・デ・ミランダ・ヘンリック邸、クリストヴァオ・マヌエルデ・ヴィルヘナ邸、そのほか沢山の豪邸が大きな被害を受けた。激流は石造の堅固な埠頭を越えて、王宮広場の河岸を襲い、ヴェドリア要塞のほぼ正面、税関事務所の倉庫にまで迫つた。この地が破滅すると感じて、多く人々は激流の凄まじい勢いに圧倒され、地震によつて散在する石材で、防壁を積み上げようと思案する。陸軍大佐のカルロス・メルデル、大尉で技術者のエウゲニオ・ドス・サントス・カルヴァロは国王の指令によつて埠頭を調査し、河底に漂う石材を探索して、破滅の兆候はないと断言した。

【第五二七項】 リスボン郊外では聖ジエロニモ会の有名な修道院とベレム教会、三位一体アルカンタラ解放教会がかなりの被害を受けた。ルツズ教会、キリスト騎士団修道院の一部と同修道院の精神病院は倒壊。ティヘラスコム天国の門修道院とその教会は全壊した。マリアーノ・デ・カルナードス教会も同じく崩壊し、サン・フランシスコ・ザブレガス修道院は教会と僧坊に多くの損傷を蒙つた。サンクト・エロイオ神父会のサン・ベント修道会はほぼ被害を免れた。

【第五二八項】 聖ベルナルド会の壮大なオディヴィエラス僧院は多大の被害を受けた。サン・アゴスチノ修道参事会員シェラス修道院はかなり損傷。カルニード聖母受胎修道院は全壊した。良き救済修道院は被害が軽く、秘蹟修道院も同様である。

【第五二九項】 破壊を免れた巨大な建物は、ベルム王宮の諸建築、ネセシダード宮殿、壮大で豪華な建築である秘蹟オラトリオ会修道院、イタリアカプチン会およびフランス・カプチン会のそれぞれ修道院と教会、橄欖山素足アウグスチヌス会の修道院、ラヴライド侯爵の豪邸などである。

【第五三〇項】 リスボンの地における大地震が人々に与えた衝撃を判断するには、首都を覆った状況について述べる必要がある。著名な建物を列挙するのみでは、各地域の被害を理解させえないからである。市内および近郊で火災を免れた全城を再三私は視察した。それらさまざまの街路や地区で多々考察した結果、火災は王都の三分の一を焼尽し、そうした圏内の大半は狭苦しい街路に四階・五階・六階建の住居を連ね、より人口稠密な地域であつたように思われる。また、地震はリスボンの建物の十分の一を倒壊させ、その三分の二を住めなくしたが、三分の一弱はなお居住可能なのである。ただし、大きな修復を必要とする。協議を不要とする所有地はなかつた。地震と火災で有名となつた王都の状況についてこれが比較的正しい情報である。

【第五三一項】 リスボンの地震、火災、津波による死者の数は、正確な数値としては実際に定め難い。そこでの人口稠密な地区が大半灰塵に帰し、ほかの地区も瓦礫に埋もれ、全市が無人の荒野と化したのを地震の数日後に目撃した人は、慘憺たる光景に驚倒して、住民の大半が死亡したと語つた。（ヨーロッパ全土で多くの人士がそのように書き、公にされた。）より控え目に二分の一と言う人もあり、三分の一と述べる人もある。この場合あまり考慮されていないのは、数限りないリスボンの家族が王都近郊の全地域、広範な首都圏の裁判管轄区全四十地区、さらには王国全体のあらゆる都市と街々、ほとんどの村々に避難したことである。多くの住民がリスボンからローマへ、あるいはヨーロッパ諸国のあるいはヨーロッパ諸国のある大都市へ逃れたとも考えられる。

【第五三二項】 こうした省察や情報の欠如のため以後数ヶ月多くの執筆者が死者の数についてかなり不適切で不正確で算定を記した。この地震の被害一覧を初めて書いたジョゼフ・デ・オリヴェイラ・トロヴァオは、正確な情報というよりもむしろ詩的な表現で、七万人が死亡したと述べた（同書十一頁）。『哀切な劇場』と題する作品の著者は住民の三分の一が絶命したと信じる。アントニオ・デ・サクラメント神父は『激励の慰藉』のなかで一万八千人以上が死んだと語り、

この見解が妥当な数値と思われる。『情報と忠実な記述』の著者はリスボン住民の十分の一が死亡したと推定する。（地震直後の執筆であるが、彼は非常に思慮深い。）また、『リスボン壊滅』の著者も死者は住民の八分の一と推算した。

【第五三三項】 各教区の司祭に確認を命令され、陛下がどのような算定を下されたか、私は知らない。しかし、膨大な数であつたと推測する。この確認は地震後急速命じられ、動搖する魂でなお集約できたものとして至当である。また、そうして得られた情報は調査の結果というよりも、むしろ対処すべき課題だからである。

【第五三四項】 この物語における論点の一つであるから、私も可能なかぎり厳密に調査したいと思う。なぜなら、地震の一週間後にはみな見方を控え目にしたし、数カ月後には十万人もの死者ではないと強調されたからである。そこで私は確認できる見解を得られる方法を考え始めた。街々に私が出向き、近隣から消えた住民について数カ月後どうなつたか、まずひとりに尋ねてみる。こうした面倒な調査を始めたが、時間の不足によつて続行できなかつた。その代りに私はリボンのあらゆる街々の情報を集めた。また、別の見地から五人が死亡したとされる教区の司祭を捜した。教会から避難できた沈着な民衆は、死んだ人数がそれより多いと言う。住宅や街路や教会で地震と火災により歿した人々について、私はつぎのように推論する。宗教組織と聖職者団体のすべて、貴族・閭僚の多数の連合、世俗的な同業組合、さらには司法機関と行政機関において消えた人数を確認してみよう。これらすべてについて推算した結果、記帳の仕方に大差はないので、地震の当日倒壊や氾濫や火災に巻き込まれた人数は五千有余かそれよりすくないと考える。また、治療を受けた無数の負傷者のなかで、病状の悪化により十一月のうちに加えて五千人死亡したことは事実である。この問題をめぐり厳密に算定できるのは以上に尽きる。

【第五三五項】 遊歩した聖職者はフランシスコ・サレジオ会修道士二名、テルシオ会修道士二名、カルメル会修道士十五名、三位一休会神父一六名、伝道師聖ヨハネ聖堂参事会世俗会員七名、聖アウグスチヌス会修道士五名、ポルトガル・ドミニコ会修道士三名、アイルランド会修道士四名、イエスズ会士三名、聖カミロ会修道士一名、オラトリオ会修道士四名、慈悲会修道士一名である。

【第五三六項】 ドミニカ会修道女は受胎告知尼僧院において十名、救世主尼

僧院において十四名死亡した。フランシスコ会修道女はサンタ・アンヌ尼僧院において五名、カルバリオ尼僧院において二二名、サンタ・クララ尼僧院において六三名歿した。また、聖アウグスチヌス会修道女はサンタ・モニカ尼僧院において八名死亡した。

【第五三七項】 貴族で死亡した男性はアンジェジャ侯爵の子息で総大司教教会総長のフランシスコ・デ・ノロンハ、さらにガスパール・ガルヴァオ・デ・カステロブランコ卿、マノエル・デ・ヴァイコンセロス卿、リスボン異端審問官ヴァレジヤオ・マヌエル・デ・タヴオラ、アントニオ・デ・メロ・カステロ、ロック・デ・ソーサ、國璽尚書フランシスコ・ルイズ・ダ・クンハ・エ・アタイデ、戦争大臣ペドロ・メロエ・アタイデだけである。なお、スペイン大使のペララード伯爵ベルナルド・デ・ロカベーチも駐在する公邸で逝去した。

【第五三八項】 上位貴族の女性ではマリア・ダ・グラサ・カストロ夫人、年長の令嬢とともにルリサル侯爵夫人、ゴンザロ・ザビエル・アルコバ・デ・カルネイロの配偶者アンナ・デ・モスコソ、またロレンコ・デ・アルメイダの未亡人が令嬢とともに死亡した。

【第五三九項】 博学の神父であるオラトリオ会アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレドに私は依拠している。神父は精密な調査を行つて、註解を加えた。彼の簡潔な著作はこの災害に関する文献として筆頭に挙げられる。ラテン語とポルトガル語で併記され、リスボン大地震の被害を世界に伝えたのである。

【第五四十項】 リスボンの地震と火災によつて焼尽した建物、不動産、機具、宝石、金貨と銀貨、農地は巨額に達し、その際限は測りしれない。『地震等歴史物語』の著者は様々な算定を付記しているが、みな恣意的なものと私は判断する。そのような算定とは別個に私が行つた調査は、かなりの程度より正確と思われる。ここに提示する若干の原理により、損失は莫大であつたと推算する。

【第五四一項】 リスボンの寺院で聖なる礼拝に捧げられる富は、いかにしても凌駕できないとすべての民族が告白する。富裕な都市の大半でのこれに劣らない。すべての教会には神への礼拝に供するため、金銀や貴重な宝石を鏤めた多数の聖杯、十字架、シャンデリア、大燭台、照明、聖器類が蔵され、豪奢にも聖櫃の飾り布、祭壇の台座、説教壇の飾りに銀が施されていた。これらの装飾には錦

の布地、絹織物、ビロードの刺繡、金の紐やふき飾りが用いられる。大抵は教会の全体に豪華な造作が施されていた。多額の経費をかけて広大な本殿は、麗しい石材で建造され、あまた金の彫刻と一流の絵画に飾られていた。金と銀しか見られず、豪華な装飾を施した総大司教教会には、どれほどの富が蔵されたであろうか。国王ジョアン五世の豪奢な趣味の所産すべても同様と考えられる。リスボンの旧大聖堂、サンタ・マリア大寺院についてもそうであるう。

【第五四二項】 王宮とその大宝物殿ふたつには精鍊された宝玉、黄金、銀が満ち溢れていた。それらはフンソエン地方で驚くほど大量に採掘され、ほかでは僅かしか得られないものである。宮殿と宝物殿にはもつとも貴重な武器が多数保管されていたのではないか。したがつて、リスボンが裕福で贅沢な都市であること、すなわち土木技師ですら多くが金や銀や宝石を持ち、絹やビロードの織物、最良の材質の家具を所有することが判れば、裁判官や貴族の殿閣と邸宅で灰塵に帰した財富、すなわち宝石、貨幣、武器、家具を逐一点検する必要はない。

【第五四三項】 焼尽した王都の一部がもつとも富裕な地域であるのを重視すべきである。なぜなら、そこにはきわめて多くの教会と殿閣、さらにはそれらの君長が鎮座するだけでなく、ポルトガル商人の大半や実業家の全員が住むからである。同じく留意したいのは、この地域にふたつの目抜き通り、金座と銀座があり、四つの広い道路を毛織物や絹織物の商人が拠点とすることである。また、市中を練り歩き、極上の装飾品を売り捌く商人で殿閣の中庭は混み合っていた。リスボンの三つの中心地では小間物屋や食品問屋が軒を連ね、工芸ギルド街はもつとも豊かな階層をつねに呼び寄せた。

【第五四四項】 王立税関所、インド商館、タバコ栽培園、商工会議所で焼尽した財産は、算定し難い。これらの建造物はきわめて広壯であり、人口稠密な首都に満ち溢れるあらゆる種類の財貨でつねに一杯であつた。外国人が多く財貨を有し、大きな邸宅を借りていたことも、留意すべきである。

【第五四五項】 かつまた火災によつていかに多くが焼失したかを省察し、リスボンの富がいかに無限であつたかを考えてほしい。数多のポルトガル人が歿し、王国も共同体も商業都市もこの火災によつて消えた。

【第五五六項】 国王陛下は熱意ある行動的な国務大臣、セバステイアン・ジ

ヨセフ・カルバルホに補佐され、国民の救済、安定、保護とリスボンの輝かしい復興のため、緊急政策を発令された。すべてが的確な決意、賢明な措置、神聖な法令であった。

【第五四七項】 早くも十一月一日枢密院院長アレグレト侯爵は、壊滅した王都を救うため周到な用意を調べ、軍隊、人材、通貨および王立貯蔵所を宰相の権限によつて役立てるよう迅速に指令された。これこそ国王陛下の仁愛を示す不朽の証左であり、わが宮廷の信義と榮誉である。やがて枢密院の対策本部をリベイラ王宮と王宮広場の二カ所に設け、火災を免れた市民や水路で辿り着いた人々へ、大部隊の支援のもとに食料を分配するよう決定された。（各地区の責任者がこれを点検することも命じられた。）また、陸路で来た人々にも混乱なく分配できるよう、対策本部が食料を王都の入口に用意することも指示された。こうした分配の実情を審査するため、審議官にはニクラウ・ルイズ・ダ・シルバとアントニオ・ロドリゲス・デ・レオンが起用された。これらの方々は多大の熱意と尽力をもつて行動され、リスボン市民救援のため食糧の確保にも奔走された。国王陛下もあらゆる王室の特權と裁可の権限を、市門へ出荷される食料品すべて、さらにはベレムのサンタレム河岸で取引される魚介類すべてに適用し、翌年一月までそうした裁量を継続するよう命じられた。震災直後の数日とくに懸念された飢餓が、この賢明な措置によつて完全に防止された。

【第五四八項】 まもなくエヴオラの竜騎兵隊とペニッシュ、エルヴァス、オリヴエンサの各歩兵隊が王宮へ招集され、近衛兵隊の四分の一がベレム、カンポリド、コロヴィア、カンポ・サンタ・アンア、カルダル・ダ・グラサ、さらには（ロシオ）四辻に駐屯し、主要な街路の管理にあたつた。彼らの駐屯をアテンテージョ地域の連隊が引き継ぎ、竜騎兵隊は数カ月以内に本来の部署に戻るよう定められた。こうした必要に応じて応急の兵舎が木材で建造された。

【第五四九項】 神を畏れぬ大規模で多様な掠奪が王都で頻発するとの報告がなされたので、流れ者を取り調べるとともに、疑わしいと思われる人物、司法長官レデドール公爵の通行許可証を携えぬ人物を検束し、莫大な盗品をリスボンで差し押さえるよう、同じく国務大臣が司法官に命じられた。また、レデドール公爵は閣僚の手勢となる司法官と法學士を任命され、王都十二地区の監査官のもとで両者の連携を確立するよう指示された。すべて掠奪の容疑者を簡略な調書によつて起訴すること、またレデドール公爵に任命された裁判官が、事実自体の確認

と原告自身の陳述に基づいて判決を下し、特例として迅速に即日容赦なく処刑す
よう、十一月四日の勅令で命ぜられた。この勅令によつて大勢の罪人が死刑を宣
告され、數カ所に設けられた絞首台で処刑された。おぞましくも彼らの遺体は数
日間絞首台の脇に曝されたのである。懲役に処せられ、瓦礫の除去作業を命じら
れた罪人も多い。掠奪という人災がこれによつて根絶された。

【第五五〇項】 だれもが飢渴しており、種々の食料品が高騰した。用務も急
増する反面、人手が減つたため、法外な賃金も要求された。国王陛下は勅令を發
せられ、すべての食料品を十月末の価格で販売すること、いかなる仕事や労務者
であろうと、通例以上の賃金を与えてはならぬこと、かつまた違反者には刑罰と
して瓦礫の除去を科することを命じられた。

【第五五一項】 ときには住民が非常に高い家賃で住宅を借り、地主も法外
な借地料を要求することを、同じく国王陛下は聞き及ばれ、震災後の賃貸契約書
をすべて無効にし、裁判所の査定手続なしには土地を賃貸してはならぬ、と十二
月三日の法令に定められた。なお、住居に關しても同様の措置が下され、震災以
前の家賃から逸脱せず、従来の金額をほぼ保持すること、また違反する場合には
財産を没収することが警告された。

【第五五二項】 王都の範囲をアルカンタラ、アルコ・デ・カルバルハオ、カ
ンポリド、クルズ・ドス・カトロ・カミンホス、サンタ・アポロニアなどの市門
の内部に限定しつつ、この地域では特別の認可なしに家屋を建ててはならぬと、
同じく十二月三日の法令により命じられた。

【第五五三項】 まもなく最高の技術者マヌエル・デ・マイヤに里斯ボン全地
区の設計図を作成することを命じられ、雄大な構想の公表に期待を寄せられた。
かくして大きな広場や真直な道路を造るとともに、均等な高さ、六十五フィート、
五十フィート、三十フィートにして左右対称の調和ある建物を築き、焼尽した王
都の再興のためすべてを改革する全体計画が立案される。こうした計画の公表以
前に新たな住宅を建てたり、破壊された建築を再建することは、王都のふたつの
法令によつて禁止され、執行の妨げとなる境界画定がただちに無効とされた。

【第五五四項】 大都會に居住する住む多くの多数が、數日間または数週間離
散して近郊に逃れ、ついには國中をさまよつたあと、王宮広場、テージョ河畔、

サンタ・アンナ公園、サンタ・クララ公園、サンタ・バルバラ公園などリスボンの主要な地点へ、さらにはあらゆる道路の余地、王都近郊の野原、修道院の裏庭へ辿りつき、そこに木材で仮小屋や仕切りを設けた。震災直後六カ月の間に九千以上の仮設小屋が構築される。その後なされた小屋の建造や改築は、礼拝用の十字架を二千個も三千個も祀るためもあり、そうした住いに要する日用品の供給と同じく、信じ難いほどの出費と遅滞できぬ多大の労力によつて達成された。

【第五五六項】 同じく特筆すべきは、一年余りの期間に千戸以上の住居が再建されたことである。（六千クルザードを多少超える経費であった。）また、近郊にも多数の住居が新築された。この莫大な経費に居住可能な全家屋の修復費を加えると、震災後王都の事業に要した金額は五千クルザード以上と算定される。

【第五五七項】 総大司教枢機卿猊下は十一月十一日付教書を国王陛下をとおし通達され、大司教コレジオ、サンタ・マリア大寺院、聖職者団体、各修道会、リスボン市会の参加のもとに同月十六日、恩寵を乞う祈祷行列を（サン・ロカ教会）サンタ・ヨアキム礼拝堂からネセシダーデス教会へ実施すること、また今後毎年十一月の第二日曜日には聖母マリアの加護を願い、晩課の断食を捧げることを指示された。この祈祷行列には国王陛下、王族の方々、宫廷の全員が参加され、きわめて敬虔かつ献身的に當なまれた。

【第五五八項】 十二月十三日同じく総大司教枢機卿猊下の指示により聖職者団体と王都の修道士がみな素足で平伏しつつサンタ・ヨアキム礼拝堂に集まり、神の慈悲と聖者の加護を懇願して祈祷行列を行つた。ラセモニア大司教と総大司教座副司祭に先導されて、この行列では総大司教大寺院の高位聖職者三名、王族の貴人、聖堂参事会員があとに続かれ、市会議員、多くの宮廷貴族や平民も加わつて、ネセシダーデス教会まで進んだ。そこではオラトリオ会の神父がローマ教皇の使節フィツリペ・アシオリ卿に補佐されて、巡礼者すべての足を洗つた。こうした謙抑な所作や多くの高潔な行為が周囲の人々を感涙させ、リスボン住民の模範ともなつた。王都のあらゆる修道会と数多の団体も公私にわたる悔悛を示し、敬虔な祈祷行列を営んだ。多くの全般的告解やさざまな徳高き行為もなされた。ああ、称讃すべき稀有の御業！

【第五五八項】 つぎにリスボン近郊における大地震の被害について情報を書き留めたい。三百以上の地区から成る王都近郊はすべて建物の被害を受けた。聖

ペドロ・ド・バルカレーナ教会の倒壊とともに三名が死亡し、ライス・マゴス・ド・カンポ・グランデ教会、サント・アドリアン・ダ・ポノバ教会、サント・ジョアン・バプチスパ・ド・ルミアール教会、聖母オリーバエス教会、サント・アントニオ・ド・トジャール教会は若干の礼拝堂とともに著しく破壊された。多大の被害を受けた地区は、カンポ・グランデ、ルミアール、サント・アントニオ・ド・トジャール、カルニードである。王都近郊では五十名が死亡した。

【第五五九項】 マフラでは強烈な地震と地下の轟音が感知された。世界の驚異のひとつとされる華麗な建築群が揺れ動き、波濤に翻弄される船の如く上下左右に傾いて、見る人々を驚倒させた。各所で相当の被害も生じた。高価な大理石の多くが粉碎され、高楼の燭台が鉄棒で宙吊りとなり、すぐに落下した。南側の角塔は倒壊し、宮殿の穹窿を破壊した。庭園でも二箇所が崩れたものの、とくに被害はなかつた。修道院に隣接する地点で足幅ほどの亀裂が見出された。

【第五六十項】 村落ではサン・アンドレ教区教会が多大の被害を受けた。ビスコンデ・エ・ポンテ・リマ宮殿と若干の個人の住居が完全に破壊された。その日はレアル会修道士が断食をして、パンや水を摂らなかつた。急遽聖体が開陳され、祈祷が続けられた。午後には悔悛の祈祷行列が営まれ、聖職者全員と多くの一般人が悔悛の証しとして素足になつた。内では主任司祭アントニオ・ド・サンタ・アンナが厳かに説教した。修道院の寮舎では三つの居室が多大の被害を受けた。

【第五六一項】 カスカエスの村落も多大の被害を蒙つた。城砦と兵営が破壊された。ふたつの教区教会とともにカプチーヌ会サント・アントニオ修道院およびマリアノス敬虔修道院も大きな損傷を受けた。カスカエスのマルケゼス宮殿も相当の被害を蒙つた。

【第五六二項】 シントラの聚落ではイエズス会サント・マルチノ教会が倒壊し、司祭レイムンド・ヘンリク・ミランダと二四人が死亡した。慈悲教会とその僧院も同じ被害を蒙つた。マノエル国王によつて造営され、ジョアン五世によつて改裝された麗しい兵器庫を別として、シントラの王宮は完全に破壊された。この聚落の周辺ではジェロニモ会修道院、三位一体教会・修道院、イエズス会のサンタ・マリア教会とミゲエル教会が完全に破壊された。著名なインド副王ジュアン・ゴ・カストロに設けられた名高いペナベルド農園では、内部の建物と若干の

庵室が大きな損傷を受けた。ノートルダム・ド・モンテの低地では高潮の夥しい氾濫が生じた。この聚落では七三名が死亡した。

【第五六三項】 エリセイラでは大半の建物が地震によつて破壊された。しかし、教会と礼拝堂に大きな被害はなかつた。終日海は怖ろしい高潮となり、数艘の小舟が岸に打ち上げられた。

【第五六四項】 ペニッシュの被害が僅かであり、三名が瓦礫で死亡したのみである。しかし、大山のような海流が押し寄せ、これに没されるのを怖れた住民が、避難した砂洲で五十人死亡した。

【第五六五項】 リバテジヨのすべての聚落が大きな被害を受けた。アルハンダ、ヴィラ・フランカ、コスタヘイラにおける破壊はそれ以上であつた。聖フランシスコ尼僧院では三名の修道女と十四人が死亡した。

【第五六六項】 アランケルも多大の被害を蒙つた。サント・フランシスコ教会＝修道院の倒壊では二名の修道女と三名の修練女、そのほか三十人が絶命した。すべての教会が著しく破壊され、倒壊を免れたのは三十の建物にすぎない。サント・ジエロニモ・ド・マト修道院、近隣の聖パウロ会修道院、カルメル会オルハルボ修道院、カプチン会カヌノタ修道院も甚大な被害を受けた。

【第五六七項】 ボルトガルの重要な聚落であるサンタレムでも地震によつて建物に相当な被害を蒙り、大きな危険に曝された。といふのは、その地域で広く深い亀裂が生じ、地底の硫化物から硫黄の悪臭が立ち籠めたからである。いずれも高名な聚落の教区教会であるサント・エステヴアオ教会（現在は聖なる天命奇蹟教会として知られる）、サント・マルチノ教会、サント・ジユリアン教会、サント・ルレンソ教会、救世者教会、サン・ティアゴ教会、サンタ・イリア教会、サンタ・クルス教会も甚しく破壊された。多数の僧院も同じような損傷を受けた。最大の被害はサント・フランシスコ修道院とサンタ・クララ尼僧院であつた。慈悲教会ど同施療院の破壊も甚大である。個人の住居がとくに瓦解したのは、聚落でもつとも高地に位置する田園マルヴィラである。『博学問答』と題する論述で、高雅にして学殖豊か、と誌された学問所のひとつも地震の被害を蒙つた。

【第五六八項】 王国おけるシトー会の中心、初代の国王により壯麗に造られ

たアルコンバ正統修道院も建物の一部に相当な損傷を受けた。地震が鎮まると、シャクダの沖合から巨大な海流がこの修道院に押し寄せ、聚落の全域に浸水した。折しもシトー会ではマグダレー修道院とテルセイラ教団の修道女を伴つてすべての修道女が祈禱行列を営み、参加した告解者の果実に飾られてサント・ブルナルド教会ベルナルヂノ神父の説教が行われていた。

【第五六九項】 十一月五日同じく多数の人々を従えてシトー会は、泉の源へ祈禱行列を実施し、全員が天に慈悲を哀願した。セント・ベント教会のルイズ神父が簡潔な説教を行うと、泉が本来の流れに戻り、潤沢に湧き出るのを目にしてみな安堵した。その後数日ほかの神父たちも避難先で説教を続けた。

【第五七十項】 湧き水が修道院に戻ったので、十二月二九日その聚落や近隣の地域から夥しい男女を集めて、シトー会の修道士たちが高名なナザレ神殿で主キリストと聖母マリアに感謝を捧げ、セント・ベント教会のルイズ神父が伝道者の熱誠をもつて説教を行つた。断食していた修道士全員が、参集した三千人以上にパンを分け与えた。

【第五七一項】 同様に王立修道院の院長、マヌエル・ド・バルボザ神父は壯麗な神殿が神の恩寵によつて壊滅を免れるよう、三度の祭礼を行うことを約束され、シトー会全員とその信者が七月の二日、四日、十一日に順次秘蹟教会、ピエダーダ聖母教会、サント・ベルナルド教会で厳肅に営まれた。

【第五七二項】 同じく聚落ではセトウヴァールが大きな被害を蒙つた。ここでは地震によつて神殿、修道院、住居の大半が壊滅した。押し寄せる怒濤も、障壁と建物を数多く破壊した。二艘の大型船をはじめ多くの船が転覆するのに人々は驚倒し、陸地では五百名が海流に攫われた。ボンフィーム＝イエス広場では二八の泉が枯渇した。かつまた住宅数戸で火災が発生し、多大の被害を及ぼした。こうした災害の結果、千名以上が死亡したのである。

【第五七三項】 アレンテエジヨ地方もエストレマドゥーラに次ぐ罹災を蒙つた。テエージュ河流域の全聚落が多大の被害を受けた。パリメラでは教会や建物の塔が崩れ落ち、十四人が死亡した。ヴィコサ聚落では聖母受胎礼拝堂が倒壊し、数人々が絶命した。ムーラでは城砦にあるドミニカ会尼僧院が壊滅した。アルカール・ド・サルでもアルセティと呼ばれるフランシスコ会尼僧院が破壊され

た。ヴィード城では教会の本院と多数の建物が壊滅した。この地方の都エボラでは多くの大建造物に相当の被害が生じたものの、死者は一名に止まつた。

【第五七四項】 エストレナドウーラに近接するベイラ地方も地震の被害を蒙つた。この地方の都コインブラでは多くの建物が破壊されたものの、幸い死者はなかつた。サン・ドミンゴ古修道院の穹窿が瓦解し、人々は危険を感じて避難した。イエズス会教会の主要正面を飾るふたつの天蓋、イエズス会・サント・ジエロニモ修道院に属する教会の穹窿柱石、サント・フランシスコ修道院の突塔も同じように倒壊し、多くの人々を慄然とさせたが、危害はなかつた。

【第五七五項】 サント・パウロ王立イエズス会修道院の正面をなす円形の柱石、イエズス会サント・ペドロ・クルズ修道院の主要正面、サンタ・クララ修道院の装飾、サンタ・クルズ修道院のさまざまな彫像と突塔が倒壊した。ポルトガルにおけるもつとも壮麗な突塔のひとつも、三つの穹窿と三つの僧房もろとも壊滅し、住民を大きな危険に突き落した。築城の礎石もいくつか崩れ、城内の聖器保管室でも天井が損傷した。大学のきわめて壮麗な大広間、当地の重要で独自な建築も多大の被害を受け、全壊の危険を防ぐため、すぐさま補強が行われた。

【第五七六項】 地震が激しかつたので、幾度も鐘が鳴るのを聞いた。海洋が揺れ動いたかと思うと、モンデゴの波濤が狂い立つた。この日の午後ポルトガル区域の聖フランシスコ会修道士とイエズス会聖パウロ修道士、コンデ司教と聖堂参事会員、大学の学長・教授・博士による成る祈祷行列が予定きていた。偉大な高位聖職者の模範的な徳操を見倣うよう、素足となり、贖罪を願つて、あらゆるの宗派の人々が行列を繰り返したのである。修道会に属する聖堂参事会員も九日間夜通し鐘楼で素足となり、聖器の前で殉教者への祈祷を捧げた。ほかの教会でも同じような儀式がなされるとともに、遍く市中で禁欲が説かれ、それによつて生活の大きいなる改善と数々の美德の発露、とくに愛徳の実践が行われた。

【第五七七項】 ミニニョ地方およびトラズ・オス・モンテス地方では恐怖を感じたものの、さして被害を受けなかつた。震動はポルトガルの全土で感知されたが、これらの地方では比較的軽度であつた。

【第五七八項】 アルガルベ国では他の地域と同じく沿岸部で震動が激しく、多大の被害を蒙つた。

【第五七九項】 同国の都ファローでは大聖堂教会、エピスコパル宮殿、壯麗なサント・ペドロ教会、イエズス会パドロ教会、カプチン会尼僧院、修道士庵院が倒壊した。教会や住居で破壊を免れたものは結局ひとつもない。この司教区の大司教は居室の崩壊から救い出され、全市にわたり熱烈に説教するとともに、高位聖職者の敬虔で周到な行為を数々実践された。

【第五八十項】 都市ラゴスでは知事公舎の宮殿は唯一破壊を免れたが、ほかの建物にいたロドリゴ・アントニオ・ノロンハの子息と現知事のメニゼスは死亡した。カルメル会修道院は完全に倒壊し、多数の修道士がそこで歿した。

【第五八一項】 都市セルヴィアでは大聖堂、鐘楼、城砦、市壁、市會議所、聖フランシスコ第三修道院が壊滅し、瓦礫に埋れる道路で多数の人々が死んだ。

【第五八二項】 ノヴァ・ド・ポルチマオの聚落では、イエズス会の壯麗な教堂、さらには聖靈教会を除くすべての教会が倒壊した。

【第五八三項】 ルーレの聚落では多数の建物が壊滅し、一五〇人以上が死亡した。ラゴアではマルトリツ教会とほぼすべての家屋が破壊された。新築まもないカルモ修道院も全壊し、修道士一名と一般人数名が犠牲となつた。建物の瓦礫によつて多数の人々が死亡した。結論的に言えば、この国で大きな被害を免れた都市や村落はひとつもない。

【第五八四項】 コスタの海洋が通常の水面より数バラ（訳注*）隆起して、多数の地点で氾濫し、退き際にもいくつかの門口の壊したあと、アルブフェイラの町中に大量の魚を置き去りにした。

* バラは一・一メートルに相当する。

【第五八五項】 スペインについてはエステリオ海岸に近い地域で比較的大きな被害があつた。マドリッドでは十時十八分に震動が感知された。すべての住民を慄然とさせ、八分間続いたのである。王都の建物のうちプラド・カプチン会サント・アントニオ教会とビエン・シユセソ聖母教会の正面を飾る二つの十字架が崩れ落ちた。

【第五八六項】 セヴィリアでは寺院と建物が多大の被害を蒙った。八人がの死亡した。『リスボン報知』一七五五年第四六号で伝えられたが、甚大な被害あるものの、正確な情報に欠けている。フエルバは寺院と家屋が一層大きな被害を受けた。カディス、サンタ・マリア・エル・プエロト、サント・ルカール、エグゼレス、ポルト・レアル、アルジェシラス、アヤモント、アリカンテ、およびコルドバでは強い震動が発生し、相当の災厄となつた。グラナダでも強い揺れを感じ、スペイン王国の港湾マラガも多大の被害を受けた。ジブラルタルやスペイン海岸の他の地域もきわめて強烈な震動に襲われ、ポルトに近い山岳でも山崩れが見られた。

【第五八七項】 フランスではラ・ロツシェル、ボルドー、その他沿岸部で地震が感知された。アングレームの近くで轟音とともに大地の亀裂が生じてその割れ目から赤水の奔流が噴出し、タンギール近郊の水源でも同じ現象が惹き起された。

【第五八八項】 ベルン、バーゼル、その他スイス各地でも同じように震動が感知された。(もつとも強い揺れに襲われたのはバーゼルである。)アウグスブルグ、ストラスブール、さらにはロンバルジアなどイタリア各地でもこの地震を感じられた。

【第五八九項】 ハーゲ、アムステルダム、そのほかオランダ各地では十一時半に運河や水路の攪乱が見られたけれども、建物の揺れはなかつた。

【第五九〇項】 ベルリンから十二レガ、バルチック海から三〇レガ離れた都市テムプリンでは十一時と正午の間にネツツオ湖、ムフルガスト湖、ロデリン湖、リツベセの湖が、突然轟音とともに著しく増水して沿岸の地域に氾濫し、数分後急速に退いた。この氾濫と退き水は半時間のうちに六度繰り返され、耐え難い悪臭が大気に発散した。

【第五九一項】 湖水の氾濫はデンマークのダレレカリア地方とヴェルメラント地方やノールウェイ王国においても観察された。スウェーデンとポレマニアでも同じような影響があつた。テオブリツツをはじめボヘミアの各地では流水が変色して溢れ、いくつかの温泉でも赤水が流れた。イギリスの沿岸部とおなじくアイルランドの若干の地域でも海水の攪乱が観察された。

【第五九二項】 アソーレス諸島においては繰り返し地震を感じたが、被害はなかつた。海は再三激しい退き潮となり、テルセエイラ島で多数の船舶が難破の危険に曝された。

【第五九三項】 アフリカでは地中海沿岸の聚落が多大の被害を受けた。聚落メキネズが全滅して、回教寺院やユダヤ教会や住宅が多数倒壊し、沢山のムーア人とユダヤ人が死亡した。サント・ディオゴ教区のフランシスコ会修道院・教会・施療院も酷く破壊されたが、キリスト教徒の死者はなかつた。

【第五九四項】 フェズ、マロック、サレなどの都市、サン・フェ、サン・クルスなど港も同じように破壊された。これらの港やサレでは海流が数里離れた内陸まで押し寄せ、多大の被害を与えた。こうした災厄によつて数千人の生命が奪われたのである。

【第五九五項】 同じ事態がアルジエリア、ララッシュ、マルモア、タンギールでも発生し、海流が大きな災害を惹き起した。スウタとテスアンでは比較的被害はすくないものの、多くの建物が破壊された。

【第五九六項】 メキネスからやや遠方にある八つの湖で陥没が生じて、ひとつずつ村落が沈没し、兵舎にいた騎兵六千人とすべての住民が犠牲になつたと伝えられる。また、サレからモロッコに向かう一群の隊商も同じ運命に陥つたと言われる。ペイゼスでは地底から凄まじい洞音が響いた。

【第五九七項】 アメリカでもこの地震の余波を受けた。バルバダス諸島では二時間後の一時頃海面が低くなつたあと、突然波濤が五フィートの高さとなり、激しくまた沈下した。こうした波濤の起伏は十五分にわたり、五時以降弱まつたものの、宵の十時まで続いた。アンチゴアでも海流の攪乱が確認された。また、ニューヨークでも震動が感知された。

【第五九八項】 ついで十一月一日以降の地震の所産と影響について要約するが、類似する多くの出来事に關し副次的な問題には立ち入らない。

【第五九九項】 地震直後の二四時間には大地がほとんど間断なく震動を続

け、毎時間感知された。多くの人がまたも揺れたと思い、最初の地震の恐怖から発する幻の震動と疑う者もいたが、スペインでもやはり揺れが認められた。私の観察によれば、こうした震動は最初の三日間ほど間断なく続き、屋内でも確かに感知されたが、当初のようには強烈にはならなかつた。十一月一日以降の八日間つねに震動は反復し、やや強いときもあつたが、微弱なものは感じない人もあつた。

【第六〇〇項】 十一月八日の朝八時半に大地が激しく揺れた。この震動はポルトガル海岸の沖合六十リガでもイギリス船において感知された。

【第六〇一項】 同月十五日朝五時に大きな震動があつた。万聖節に地震を感じたグラナダ各地でこの揺れが発生した。

【第六〇二項】 同月十六日午後三時半過ぎに大きな爆発が起つた。コンポステーラとラ・コルーニャを搖がして、若干の被害と海流の攪乱を惹き起した。

【第六〇三項】 同月十七日フランスのブザンソンとリヨンでの震動が認められたが、とくに被害はなかつた。イギリスでも同じく感知された。

【第六〇四項】 同月十八日北米のボストン、フィラデルフィア、メリーランド海岸で震動が認められた。これはポルトガルでも感知された。十一月の末パードル・カブレラにおいて終日震動があり、十二月にかけて一ヶ月揺れ続けた。

【第六〇五項】 十二月九日大きな地震があり、スペインを越えてフランスのラングドック、プロヴァンス、デルシナド、ボルゴンハ、アルザスでも感知された。また、フランソニア、スアヴィア、スイス諸州、ミラノでも認められた。

【第六〇六項】 同月十一日バイエルン地方、とくにドナヴェルトやインゴルシュタットなどの都市で大地の揺れが認められた。ポルトガルでも午前五時頃二度にわたり非常に強い震動を感じた。スペインでも強く揺れ、ほぼ三分間続いた。

【第六〇七項】 同月十八日ヴィトシャヴェンなどイギリス各地で強い震動が感知された。

【第六〇八項】 同月二一日午後九時頃非常に強い地震があり、リスボンとその近郊で若干の被害が生じた。さらにながく続けば、まさしく大惨事に至つたと思われる。

【第六〇九項】 同月二五日午前二時頃リスボンなどポルトガル各地で震動を感じた。

【第六一〇項】 同月二七日をもてて強い地震が発生し、テオンヴィルでは兵舎が倒壊し、五百人が瓦礫のもとで絶命した。エクス・ラ・シャペル、コロニア、ブリュッセル、オランダ各地へも拡大した。システィロン近くのデルフィナードでは対峙する山岳が崩壊し、谷間の川は湖に一変した。モベージュに隣接するフランドルでは大地が陥没して、大きな洞穴が生じた。

【第六一一項】 同月夜半の一時と二時の間にスコットランド入植地で幾度か大地が大きく揺れたが、被害はなかつた。

【第六一二項】 一七五六年一月に多くの震動があつたけれども、これらは記帳には見出せず、覚えてもいない。なぜなら、とくに記帳を始めたのは、同年四月二十五日の大地震からである。

【第六一三項】 二月十二日午前五時から午後九時にかけてモンテギル山で大砲のような轟音が発し、大地が幾度か揺れた。その轟音は五日前にも聞こえ、人々を驚愕させたのである。同じ十二日コネテ・エル・レアルで昨年十一月一日に生じた隆起がこのときもとに戻つた。

【第六一四項】 同年二月十八日の地震は前年十一月一日以後では最大であった。七時から八時にかけてネーデルラント全域で感知された。ケルンとボンでは八時に、ついで九時前にも数分続く地震が発生した。これらの都市では最初の震動で多くの煙突が倒壊した。井戸や泉では水の攪乱も見られた。同じ地震はパリやヴエルサイユなどフランス各地でも感知された。おりしも雨期にあたり、暖かな西風を受けていた。地底からの轟音も一分以上続いた。リエージュでは揺れが一層ながく持続した。デンマーク、スウェーデン、ノールウェイでも弱震が感じられた。

【第六一五項】 二月二四日アキスグラン、ビスピードス・デ・ムンステル、パデルボルンで地震が発生し、きわめて激しく多くの被害を与えた。同月末にヴァレシオス国で地震があり、多数の住居が破壊された。

【第六一六項】 三月にヴェスピアス火山で煙と炎の噴出が始まり、四月まで続いて溶けた瀝青岩の奔流を惹き起した。近寄って調べようとした外国人三名が死亡し、連れの同国人も動転して、彼らを救助できなかつた。

【第六一七項】 四月十三日朝ヴェネチアで地震が感知されて数分間続き、三時間後にもふたたび揺れたが、被害はなかつた。

【第六一八項】 同月一八日より大きな地震がパドヴァ、ヴェローナ、トレヴィーゾで発生し、強い衝撃によつて多くの煙突、サンタ・マルガレータ教会の穹窿、司教神学校の一角が倒壊して、住民を戦慄させた。翌日の夜にもかなり強い震動が感じられた。その際南西から北西へ揺れるに向うと観察された。

【第六一九項】 同月二四日二時十五分頃ポルトガルで地震が発生した。当日以降試みにすべてを私は記帳した。

【第六二十項】 同月二五日午前三時曇天にして、ときには風雨もあつた。

【第六二一項】 同月二六日午前五時半に大きな震動が発生したけれども、ながくは続かなかつた。曇天であった。フランス、ブレシス、サン・ジュストでは二度弱い振動が感じられた。

【第六二二項】 同月二七日午前三時と午後九時の二度にわたり震動が発生し、曇天であった。

【第六二三項】 同月三十日午前五時頃に弱い揺れであつたが、ながく続いた。曇天であった。午後九時十五分にパリ、ヴエルサイユ、ピカルディ地方で地震が感知され、同時に森林を突き抜ける強風に似た轟音が地下から聞えた。また、プレシスの城砦では石造りの煙突が倒壊した。

【第六二四項】 五月三日午前一時に地震が発生した。その日は雨天で、前日

に幾度か雷鳴が聞えた。

【第六二五項】 同月四日夜半過ぎに弱い揺れがあつた。
同月五日午前四時半に弱い地震が感知された。

【第六二六項】 六月二日ブリュッセルでふたつの地震が感知された。第一は午後十時に、第二は夜半により強く揺れた。これらはリエージュ地方やレンブルゴにより強く、ライン沿岸の多くの都市でも感じられた。ケルンでが二分以上揺れ続けた。

【第六二七項】 七月三日リスボンで十一月一日の地震に次ぐ大きな揺れが発生した。午後十時半地下の轟音が十秒か十二秒遠くの太鼓のように聞えて、最初の震動は王国のほとんど全土で感知された。これに先立つて当日午後蒸氣が王都を覆つた。地震後まもなく海上に濃霧だ立ち籠め、しばらく南から微風がそよいだ。深夜一時にも新たな地震があつた。

【第六二八項】 八月五日午後弱い振動があつた。

【第六二九項】 同月十七日天気晴朗なパドヴァが午前十時半頃暗い雲に覆られ、嵐に襲われて、多大の被害を受けた。その後三度大地が激しく揺れ、建物の破壊と住民の死亡を惹き起した。当日および翌日に他で地震が発生したことが記録されている。それらの被害はリスボンへ誇張して伝えられ、しばしばあるよう現場の状況とはやや異なつていた。

【第六三十項】 同月二十日午前六時四五分頃弱くはあるが、ややながい震動が発生した。

【第六三一項】 同月二六日午前七時四五分頃比較的強い地震がややながく、ところによつて一分以上続いた。私自身が感じたのは二十秒ほどである。

【第六三二項】 九月十二日午後八時頃短い揺れがあつた。

【第六三三項】 同月十七日深夜二時十五分頃弱い地震があつた。

【第六三四項】 十月二二日午後二時半静穩な天候のナポリを突然きわめて激しい地震が襲い、三〇秒以上続いて多くの建物に甚大な被害を与えた。海洋にも著しい攪乱が見られた。これに先立ち八月十五日以降ヴェスヴィアス火山の噴火があつた。この十月コンスタンチノープルでも數度地震が発生し、若干の被害を蒙つた。

【第六三五項】 同月二九日深夜一時半頃強い地震があり、十秒続いた。

【第六三六項】 十一月十九日午前零時四五分頃弱い揺れがあつた。そのとき空は雲に覆われ、南から強い風を受けた。

【第六三七項】 同月二六日午前十一時四五分頃コンスタンチノープルで大きな地震が発生して七分間続き、これにより五千の住居、五十の殿閣、五つ回教寺院が全壊し、さらに多数の建造物は破壊された。死者は八千人以上である。これに続いて火災が拡がり、鎮火できないため全市が灰塵に帰すのではないかと憂慮された。

【第六三八項】 十二月にも小さな地震が数度感知された。

【第六三九項】 一月十六日激しい風雨ののち静穩な夜になつた頃、午前二時に強烈な地震が発生した。ながくは続かなかつたが、震動に三分か四分先立ち、地下の轟音が聞こえた。

【第六四十項】 一七五七年には地震がより微弱でより少數になつたことを、まず書き伝えたい。

三月一日午前一時頃発生した地震は他の多くと異なり、ふたつの衝撃ないし強烈な震動となつてしまらく続いた。同じく五月二一日十一時十五分頃感知された地震は広い範囲にわたる。毎月數度揺れを感じたが、比較的微弱であった。九月と十月リスボンでは地震が感知されず、記帳も十月二十日で終つてゐる。しかし、アレンテージョではこの間、とくに十月十日午後六時半に強烈な地震が発生し、午後十時にも一層弱い揺れが感じられた。他の確かな報告によれば、同日この地方では十二回地震が感知された。

【第六四一項】 謎めいた話であるが、同日リスボンのアルカントラ河岸で

は、第三身分統合裁判所の構築による仮設小屋で一度だけ一時頃地震が感知された。この現象をどう理解すべきかは別の機会に論じよう。私たちにみずから体験させ、人心に痛切な記憶を刻み込んだ大地震の影響はなお尽きないが、いまだ論じないほかの要因についてさらに記述しよう。

（二〇一二年十二月二十四日初出）